

研究拠点形成事業
平成 28 年度 実施計画書
(平成 24～27 年度採択課題用)

A. 先端拠点形成型

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	北海道大学アイヌ・先住民研究センター
(カナダ) 拠点機関：	アルバータ大学
(連合王国) 拠点機関：	アバディーン大学

2. 研究交流課題名

(和文)： 北方圏における人類生態史総合研究拠点

(交流分野：考古学、人類学、生物学、環境科学)

(英文)：Advanced Core Research Center for the History of Human Ecology in the North

(交流分野：Archaeology, Anthropology, Biology, Environmental Science)

研究交流課題に係るホームページ：<http://nt.cais.hokudai.ac.jp>

3. 採用期間

平成 25 年 4 月 1 日 ～ 平成 30 年 3 月 31 日

(4 年度目)

4. 実施体制

日本側実施組織

拠点機関：北海道大学アイヌ・先住民研究センター

実施組織代表者 (所属部局・職・氏名)：アイヌ・先住民研究センター・センター長・
常本照樹

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：アイヌ・先住民研究センター・教授・
加藤博文

協力機関：琉球大学大学院医学研究科、東京大学総合研究博物館

事務組織：北海道大学国際本部国際交流課、文学部事務部

相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名：カナダ

拠点機関：(英文) University of Alberta

(和文) アルバータ大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文) Department of Anthropology, Professor,
Andrzej WEBER

協力機関：(英文) なし

(和文) なし

経費負担区分 (A型)：パターン2

(2) 国名：連合王国

拠点機関：(英文) University of Aberdeen

(和文) アバディーン大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文) Department of Archaeology, Senior Lecturer, Rick KNECHT

協力機関：(英文) Oxford Centre for Asian Archaeology, Art and Culture, School of Archaeology, University of Oxford.

(和文) オックスフォード大学考古学系オックスフォードアジア考古学・芸術・文化センター

経費負担区分 (A型)：パターン1

5. 全期間を通じた研究交流目標

人類は、生理学的に熱帯型の生物であるにも関わらず、既に4万年前には北緯70度の北極圏にまで到達した。その動きは解剖学的現代人の出現と拡散の動きと連動する。250万年間のホモ属の人類史において農耕出現以降の歴史は、わずか1万間に過ぎず、その大半は狩猟採集民の歴史であった。狩猟採集民社会の人類史の解明は、すなわち我々現代人の進化的位置付けを解明することになる。しかし、従来人類史は中緯度の国家史・文明史中心の叙述であり、狩猟採集社会は、その初源的生活様式としての位置付けにあまんじてきた。

北海道大学を中心とした研究チームでは、2011年からアルバータ大学、アバディーン大学などとの間で北方圏に展開する狩猟採集民社会の環境適応行動の特性とその独自の歴史の変遷過程を解明する目的で考古学、古環境学、分子生物学、人類学などの領域横断型のプロジェクトを組織、スタートさせた。本事業では、北方圏の狩猟採集民の人類史の中でも、北海道島周辺の変動する自然環境とその中で営まれた人類環境史の独自性と多様性を解明していく。本研究の中核には北海道をフィールドとした複数国の研究者、若手研究者が参加する国際フィールドスクールを企画実施し、中核的研究拠点の役割を果たす3大学の施設を活用し、単独の大学機関ではカバーできない研究手法や研修制度を国際共同として実施していく。特に1) 国際フィールドスクールでは、異領域の研究手法の統合と研修機会の提供、研究者交流の場を提供する。2) 国際セミナーにおいては、最先端の調査研究手法と研究機材の使用法の習得の機会を提供する。3) これら国際共同研究を通じて、若手研究者の研究機関を超えた指導体制、共同研究の枠組みを構築する。

6. 前年度までの研究交流活動による目標達成状況

平成27年度は、当初計画に従い、海外研究拠点と連携した共同研究の中核となる理論的課

題の検討を目的としたセミナーを実施し、以下の成果を上げている。

＜研究協力体制の構築＞

(1) 平成27年度の当初計画で提示した計画とその進捗状況

a) ブリテッシュ・コロンビア大学での北方圏の人類史および先住民族文化遺産についての共同討議について

→6月に事業責任者である常本センター長と、コーディネーターである加藤博文教授が北海道大学国際本部の専門職員と共に、ブリティッシュ・コロンビア大学を訪問し、先方の人類学博物館及び人類学部、先住民教育プログラムの部局長及び担当者と共同講義企画について協議し、平成28年度に開設することを確定した。また本事業の開設に際して、北海道大学総長より全学運用定員枠を活用して、助教1名を新たにセンターに配置してもらっている。

b) アバディーン大学での環北太平洋沿岸での先住民考古学に関するセミナーについて

→平成28年2月にアバディーン大学においてアイヌ文化伝承者及び工芸家を交えて、先住民考古学及び文化遺産についてのセミナーを開催した。アバディーン大学側では、現在アバディーン大学が研究プロジェクトとして実習を行っているアラスカの先住民コミュニティの若手メンバーが参加報告した。北太平洋沿岸地域の先住民コミュニティとの連携、先住民文化遺産の保存と活用についての議論を実施し、新たな研究ネットワークの構築に取り組んだ。

c) オックスフォード大学および大英博物館におけるアイヌ民族資料の調査および先住性についてのセミナーの開催

→オックスフォード大学ピットリバース博物館に収蔵されているアイヌコレクションの中に北海道平取町に由来する民族資料が多く含まれていることが判明したことから、プロジェクトメンバーに加えて、平取町在住のアイヌ工芸家（伝統工芸士）を含めたチームを編成し、資料調査を平成28年2月に実施している。

d) オックスフォード大学での自然人類学に関する共同セミナーの開催

→平成28年1月にオックスフォード大学において自然人類学領域のセミナー’ The 3rd Workshop of Biological Anthropologists’を開催し、形質人類学のみならず同位体科学、古代DNA解析の領域での研究交流を実施し、ネットワークの拡大に努めた。

e) フローニンゲン大学およびウプサラ大学との研究ネットワークの拡大

→オランダ、フローニンゲン大学においては、若手向けのセミナーを平成28年2月に実施し、スウェーデン、ウプサラ大学の教員、若手研究者を巻き込んだ共同研究や共同セミナーについては、平成28年2月に実施を通じた研究ネットワークの拡大を図った。

f) 北海道大学の learning satellite 構想と連携した連合王国およびロシアでの大学院生向け共同講義への日本人研究者、大学院生の派遣

→平成28年3月にロシアの極東連邦大学（ウラジオストック）と北東連邦大学（ヤクーツク）において北海道大学の学部生と大学院生11名が参加する海外講義を北海

道大学の国際交流科目の一環として（世界展開力強化事業）実施した。また平成28年3月にオックスフォード大学において北海道大学の学生11名が参加する北方圏の考古学と人類学に関する共同講義を北海道大学の国際交流科目の一環として実施した。

上記以外には、以下の事業を実施し、研究協力体制の構築に努めている。

- (2) 4月、北海道大学において全体会議を開催し、平成27年度の事業計画についての打ち合わせを行った。この会議にはカナダ側コーディネーターである A.Weber アルバータ大学教授が参加し、事業後半に向けた研究計画や課題についての意見交換を行った。
- (2) 1月、ヘルシンキ大学（フィンランド）考古学部において本事業を紹介するセミナーを開催した。ヘルシンキ大学の若手研究者から礼文国際フィールドスクールへの参加希望が数多くあり、詳細についての説明を行った。
- (3) 2月、国立台湾大学人類学系において本事業を紹介するセミナーと先住民考古学と若手研究者交流に関する研究ネットワーク構築についての研究打ち合わせを行った。

<学術的観点>

- (1) 5月、帝京大学（東京）において開催された第81回日本考古学協会総会においてシンポジウムセッションを企画し、事業の中間報告を行った。このセッションにはカナダ側コーディネーターである A. Weber アルバータ大学教授が報告者の一人として参加した。
- (2) 8月、礼文島国際フィールドスクールを実施し、参加総数は過去最高の86名となった。フィールドスクールについては概要報告書を印刷中である。
- (3) 9月、ヨーロッパで開催された二つの国際会議において本事業の概要と成果について中間報告を行った。参加した国際会議は、グラスゴー大学で開催された the 21st Annual Meeting of the European Association of Archaeologists と、ウィーン大学で開催された第11回国際狩猟・採集民会議 CHAGS である。
- (4) 11月、北海道大学で開催されたサステナビリティウィークの一環として「地域社会へ与える考古学の影響」というテーマで国際会議を開催し、カナダ側メンバー2名と、連合王国側メンバー2名が参加し、討議を行った。本事業はアイヌ・先住民研究センターの事業との共催である。
- (5) 1月、オックスフォード大学において自然人類学領域のセミナー 'The 3rd Workshop of Biological Anthropologists' を開催した。形質人類学から同位体科学、古代DNA解析の成果と課題についての討議を行った。
- (6) 1月、ウプサラ大学（スウェーデン）考古学・古代史学部において本事業を紹介するワークショップを開催した。考古学と生物人類学のテーマを中心に双方の研究

成果と連携の可能性についての討議を行っている。

- (7) 2月、アバディーン大学において「先住民考古学と地域社会」に関するセミナーを開催し、日本とアラスカから先住民の若手を招聘するほか、スコットランドと日本におけるパブリック考古学の取り組みについても意見交換を行い、課題点を議論した。

<若手研究者育成>

- (1) 平成27年度の当初計画で提示した計画とその進捗状況
- a) 外国人招へい教員の特任助教または特任講師として任用
→ベルリン自由大学からポスドクの若手研究者を招聘し、北海道大学で特任助教として雇用し、S・1の礼文国際フィールドセミナーなどで大学院生向けの講義を実施した。また北海道北部の長期的な古環境変遷についての共同研究を実施した。
 - b) 大学院生のオックスフォード大学およびフローニンゲン大学への短期派遣
→大学院生の専門テーマの関係から、平成27年度は、博士課程の院生を1名、アラスカ大学へ1ヶ月間派遣し、博士論文に関する資料収集に従事させた。また派遣期間中に英文での研究成果の報告の機会を提供している。

当初計画以外に以下の新たな成果があった。

- (2) 1月、若手研究者の海外調査派遣として博士課程の大学院生をアラスカへ1ヶ月間派遣するプログラム
- (3) 2月、フローニンゲン大学（オランダ）北極研究センターとデンマーク国立博物館において若手研究者養成についての研究討議及び礼文国際フィールドスクールを利用したネットワーク構築についての研究打ち合わせを行った。
- (4) 相手国側2（連合王国）の協力研究者である P. Jordan フローニンゲン大学北極研究センター長と連携した、EUの研究助成を財源とする北方考古学のポスドクプログラムを立ち上げた（本事業のコーディネーターの加藤は3名の選考委員の一人）。選考は2016年3月に実施、プログラムは2016年9月よりスタート。
- (5) 3月、オックスフォード大学において、考古学研究所と共同で北方圏の考古学・人類学に関する共同講義事業を開催した（対象は、北海道大学とオックスフォード大学の学部生。将来の大学院への進学と研究へのステップアップを図ることを目的としたもの）。
- (6) 3月、北海道大学において本事業に参加する若手研究者のコンソーシアムを構築するためのミーティングを開催した。連合王国、カナダ、アメリカ、フィンランド、台湾、日本からの博士課程及びポスドクの若手研究者が参加。

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

- (1) 4月から7月にかけて連続7回の事業の一般市民向けの公開事業の一環として市民

向け講座を朝日カルチャーセンター札幌と共催して行った。

- (2) 11月、「国民との科学・技術対話」事業に参加し、立命館慶祥高校において本事業の目標と取り組みについての出張講義を行った。
- (3) 12月、「国民との科学・技術対話」事業に参加し、岐阜県立関高校において本事業の目標と取り組みについての出張講義を行った。
- (4) 北海道アイヌ協会との連携については、平成27年8月に北海道アイヌ協会が主宰する国際先住民の日記念事業のシンポジウムにおいて招待報告を行っている。また北海道アイヌ協会、日本人類学会、日本考古学協会の3者によるこれからのアイヌ人骨資料・副葬品の研究のあり方をめぐるラウンドテーブルにおいて本事業メンバーが複数参加し、意見交換に参加し、研究倫理を踏まえた新たな関係構築についての答申を行っている。
- (5) サミ議会との連携及び信頼関係の構築に向けた取り組みとしては、ノルウェー及びスウェーデン、フィンランドを複数回訪問し、ノルウェーでは国立研究倫理委員会と、スウェーデン及びフィンランドではサミ議会のメンバーと各国の状況についての意見交換を行った。ノルウェー北部（フィンマルク）に位置するサミ議会への訪問、議会メンバーへのインタビュー、意見交換は、平成28年4月に実施する予定である。
- (6) 北米北西海岸の先住民コミュニティとの連携は、ブリティッシュ・コロンビア大学における共同講義に先住民教育プログラムが参画しており、連携関係の構築を進めている。

7. 平成28年度研究交流目標

<研究協力体制の構築>

これまでの研究交流によって確立されてきたカナダと連合王国の大学間との共同研究、共同セミナー、研究者交流に加えて、平成27年度に連携が拡大したフローニンゲン大学（オランダ）、ウプサラ大学（スウェーデン）、ヘルシンキ大学（フィンランド）を巻き込んだ共同研究構想、研究者交流、若手研究者の相互派遣のプログラムを構築していく。すでに我々の拠点が北米と北ヨーロッパで継続して開催してきている共同セミナーや、礼文島での国際フィールドスクールについては、各地での周知が高まってきており、特に礼文島での国際フィールドスクールは、北米から欧州の若手研究者が交流し、研究情報を共有する有効な場としての役割を果たしつつある。

平成28年度の研究体制の構築と関連する主な事業は以下のものを計画している。

- (1) ブリテッシュ・コロンビア大学（カナダ）での北方圏の人類史および先住民族文化遺産に関する共同教育プログラムの開始と相互の大学交流協定を基礎とした短期的研究者交流の展開
- (2) フローニンゲン大学（オランダ）との大学間交流協定の締結に向けての作業
- (3) ウプサラ大学（スウェーデン）との大学間交流協定の締結に向けての作業
- (4) オックスフォード大学での自然人類学に関する共同セミナーの開催

- (5) 北海道大学の learning satellite 構想と連携したオックスフォード大学との教員交流プログラムの実施
- (6) 世界展開力強化事業（ロシアとの交流）と連携した極東連邦大学及び北東連邦大学（以上ロシア）との共同研究計画の準備と本事業メンバー（日・加・英）との交流事業についての研究打ち合わせの実施

<学術的観点>

引き続き、共同セミナーを通じて比較検討してきた検討課題である（1）集団移動と拡散、（2）海洋適応、（3）先住性の各項目のとりまとめを進める。国際雑誌への共同論文の投稿以外にも英文での報告書の刊行や、一般書籍の刊行を目指す。具体的には以下の項目を予定している。

- (1) 国際会議での研究成果の発信では、8月末に京都で開催される世界考古学会議（World Archaeological Congress-8 in Kyoto）での基調講演への参加、セッションの立ち上げに取り組む。またポストカンファレンス・エクスカージョンとして北海道エクスカージョンを企画実施する。
- (2) 若手研究者の国際雑誌への投稿、国際学会での報告を集中的に支援する。
- (3) 礼文国際フィールドスクールで調査を蓄積してきた礼文島の人類遺跡と環境気候変動に関するレポートを英文で刊行する。
- (4) 参加研究者の講義映像、研究トピックスのインタビューのデジタル映像を収録し、プロジェクトホームページを通じて発信する。

<若手研究者育成>

- (1) 平成27年度に実施した北海道大学の外国人招へい教員の枠を活用した海外の若手研究者を特任助教とした雇用制度を、平成28年度も引き続き活用し、日本側参加研究者との間での共同研究および大学院生向けの講義を実施する。
- (2) 平成28年度4月に英語圏との交流強化のために任期付き（5年）の助教枠で若手研究者を採用する。
- (3) フローニンゲン大学（オランダ）と連携してEU財源によるPhDプログラムをスタートさせる（10月1日スタート）。募集される枠の一つは、'Bringing Home Animals – Ainu and Okhotsk Culture food technologies'である。日本側コーディネーターの加藤が選考委員に加わる（<http://www.archsci2020.eu/>）。
- (4) 平成28年度は、若手研究者育成の独立したプログラムをスタートさせる。具体的には、海外の研究者の指導を受けながら、連携研究機関で研究活動を行うための中長期派遣1名、短期派遣2名の募集を行う。
- (5) 海外の若手研究者を中核とした先住民考古学研究コンソーシアムの構築

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

- (1) 平成27年度に引き続き、新聞社などが企画する市民講座と連携したプロジェクトメ

- ンバーによる公開講座を4月から7月にかけて実施する。
- (2) 「国民との科学・技術の対話」事業に参画し、海外の教員もまじえた高校生向けの講義提供を実施する。
- (3) 北海道アイヌ協会や北欧のサーミ議会、北米北西海岸の先住民コミュニティが主宰するシンポジウムに積極的に連携し、研究成果の共有を図る。また先住民の若手研究者の育成に関する共同プログラムをブリティッシュ・コロンビア大学（カナダ）やアバディーン大学・オックスフォード大学（連合王国）と連携して構築していく。
- (4) 国や北海道が進めているアイヌ民族の先住民文化遺産の保存と管理に関する検討作業に協力し、蓄積された研究成果をより良い政策提言の資料として提供していく。

8. 平成28年度研究交流計画状況

8-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成25年度	研究終了年度	平成29年度
研究課題名	(和文) 北方圏における人類文化・環境適応・景観創造 (英文) Human Culture, Adaptation, modified Landscape in the North				
日本側代表者 氏名・所属・ 職	(和文) 加藤博文・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授 (英文) KATO Hirofumi, Center for Ainu & Indigenous Studies, Professor				
相手国側代表 者 氏名・所属・ 職	(英文) (1) WEBER, Andrzej, Department of Anthropology, University of Alberta, Professor (2) KNECHT, Rick, Department of Archaeology, University of Aberdeen, Senior Lecturer				

<p>28年度の 研究交流活動 計画</p>	<p>28年度の研究交流活動計画は、以下のものを予定している。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) シベリア大陸内部の狩猟採集民社会と太平洋沿岸の狩猟採集民社会の相違点の比較研究。(カナダ側が主に調査しているシベリア・バイカル湖周辺の先史集団との比較、及びヤクーツク地域の北東連邦大学およびロシア沿海州の極東連邦大学が保有する資料の調査) 2) 北方圏の人類集団における家畜飼育伝統の歴史人類学的検証(主としてアバディーン大学 R. Knecht 博士や K. Milek 博士との共同研究) 4) 海洋適応と集団移動と拡散に関する理論考古学的研究(カナダ側メンバーであるワシントン大学 B. Fitzhugh 教授および連合王国側メンバーである P. Jordan 教授、ウプサラ大学 N. Price 教授との共同比較研究) 5) 北方圏の民族誌データの蓄積 6) 世界考古学会議京都大会 (World Archaeological Congress-8 in Kyoto) でのセッションでの報告と討論
<p>28年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待さ れる成果</p>	<p>28年度は、より広がりを持った研究ネットワークを活用して、より広い視野で北方圏の狩猟採集民社会の独自性、長期的な自然・生活環境の動態を比較検討することが可能となる。これらの取り組みによって北方圏の人類社会の文化的多様性を示す具体的な事例蓄積が期待される。28年度の研究交流活動によって期待される成果には以下のものが挙げられる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 共同研究のネットワークの拡大と有機的なつながりによる連合王国と北欧の中核研究機関とロシア圏の大学研究機関とを融合する取り組みの具体化。 2) 北海道大学の国際プログラムと連携した気候変動や人間集団の移住と拡散に関する共同研究を目的とした海外からの研究者招へい。 3) 先住民コンソーシアムの展開を通じた若手研究者への研究資料の提供と共同研究のネットワーク構築の支援。 4) 北大・フィンランド共同シンポジウムや、北極域研究事業と連携した、北方圏の文化遺産や文化景観に関するシンポジウムやセミナーを通じた共通課題の整理と具体的な研究プログラムの展開。 5) 新規採用する北海道大学の若手研究者を中心とした大学院生対象の研究支援プログラムの構築と新たな共同研究の展開。

平成24～27年度採択課題

整理番号	R-2	研究開始年度	平成25年度	研究終了年度	平成29年度
研究課題名	(和文) 北方人類史研究における先住民文化資源の過去と未来 (英文) Past and Future on Indigenous Cultural Properties for the Human History in the North.				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 加藤博文・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授 (英文) KATO Hirofumi, Center for Ainu & Indigenous Studies, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) (1) GOSDEN, Chris, Institute of Archaeology, University of Oxford, Professor (2) ROWLEY, Susan, Department of Anthropology, University of British Columbia, Associate Professor				
28年度の 研究交流活動 計画	28年度の研究交流活動としては、以下の項目を予定している。 1) オックスフォード大学ピットリバース博物館と大英博物館を中心に連合王国内に収蔵されているアイヌコレクションなど先住民の文化資源の収集経緯、コレクション特性の比較考察をアイヌ工芸家の参加を得ながら行う。 2) 先住民が博物館コレクションにアクセスするためのフレームづくりをコミュニティ考古学の視座から実施する。また文化遺産の知的財産権(所有権)問題についての国際共同研究の展開。 3) 先住性概念をふくむ先住民考古学の理論考古学的国際共同研究 4) 北海道大学が進める修士課程の大学院生向け国際共同夏季教育プログラム(Summer Institute)と連携したプロジェクトメンバーによる研究成果を含めた講義をオックスフォード大学とブリティッシュ・コロンビア大学で展開する。				
28年度の 研究交流活動 から得られる ことが期待される 成果	28年度の研究交流活動によって以下の効果が期待される。 1) プロジェクトが橋渡しとなり研究機関と先住民コミュニティ協業の機会創出。特に先住民社会への自らの文化資源へのアクセス機会の提供 2) アジアと北欧、アジアと北米という成立背景の異なる先住性概念の地域的相違点についての具体的な事例比較。 3) 文化遺産の返還問題が精力的に展開される北欧と北米、オセアニアを含めたグローバルな取り組みとの連携 4) オックスフォード大学を中心とした先住民考古学の理論的取り組みの成果の共有。アジアにおける事例の海外への発信。 5) 先住民考古学と先住民文化遺産という相対的に新しい研究領域に関する国際ネットワークの構築とそこへの若手研究者の参画支援。複数の研究機関が連携した拠点移動による複合指導体制での若手研究者育成。				

8-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「礼文島国際フィールドスクール」
	(英文) JSPS Core-to-Core Program “International Field School in Rebun Island “
開催期間	平成28年 8月 1日 ～ 平成28年8月21日 (21日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 日本国、北海道礼文町、浜中遺跡群
	(英文) Hamanaka site complex, Rebun, Hokkaido, Japan
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 長沼正樹・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・准教授
	(英文) NAGANUMA Masaki, Center for Ainu & Indigenous Studies, Hokkaido University, Associate Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文)

参加者数

派遣元 \ 派遣先	セミナー開催国 (日本)	
	A.	B.
日本 〈人/人日〉	10/ 210	
	44	
カナダ 〈人/人日〉	5/ 105	
	10	
連合王国 〈人/人日〉	4/ 84	
	10	
合計 〈人/人日〉	19/ 399	
	64	

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)
 B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>1) 歴史文化遺産の複合性を理解する。 2) 考古遺跡が過去の環境情報や人類と動植物など生態系との相互作用が累積した結果、形成されたものであることを実践的に学ぶ機会を提供する。 3) 遺跡に良好に保存された各種データを効率的に収集し、高精度の調査機器により遺跡情報を包括的に記録する手法を学ぶ。 4) カナダと連合王国、そして日本を主体とする多領域の研究者による最新知見を野外レクチャーを通じて若手研究者に享受し、研究課題についての議論をおこなう。</p>		
<p>期待される成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度の調査により明らかとなった縄文文化期後期に遡る文化層のさらに下位の人類居住の痕跡を確認する。今年度の調査によって浜中2遺跡のより縄文文化後期から中期にかけてのより長期にわたる文化的連続性の確認が期待できる。 ・20名の海外院生やポスドクに加え、研究者と学生による共同調査をフィールドスクール形式で実施することによる本事業の中核的課題である国や機関の単位を越えた研究組織の構築。 ・国内外の研究者による複数指導体制により個別の大学単位では不可能な国際的な教育活動をフィールドにおいて実践。次世代を担う若手研究者にとっての貴重な機会を提供。 ・文科省の世界展開力強化事業と連携することで、本事業に参加するメンバーに加え、ロシアからの院生や研究者も巻き込んだ教育プログラムが可能となる。より幅広い交流成果を生み出せる。 ・セミナーの実施を通じた文化遺産の潜在的な価値の客観的評価が可能となり、資源として活用する史跡指定に向けた保存管理計画の地元自治体への提言が可能となる。 		
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>北海道大学の拠点メンバーを中心に調査チームを組織する。また米国、連合王国、オランダ、フィンランド、台湾の院生とポスドクによるフィールドスクールの運営組織をスタートされる。海外と北大の実習生は加藤、蓑島、久保が担当し、地域社会や市民向けプログラムは岡田が担当する。校内外から参加する院生は、実習として受け入れる学部実習生に対してTAとしての役割を担う。</p>		
<p>開催経費 分担内容</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 国内旅費 備品・消耗品購入費 その他 合計</p>	<p>金額 4,200,000 円 金額 450,000 円 金額 400,000 円 5,050,000 円</p>
	<p>(カナダ) 側</p>	<p>内容 外国旅費 備品、消耗品購入費</p>	

	(連合王国) 側	内容 外国旅費
--	----------	---------

整理番号	S-2
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「生物人類学セミナー」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “Seminar on Bio-archaeology“
開催期間	平成28年11月10日 ～ 平成28年11月14日 (5日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) 連合王国、オックスフォード、オックスフォード大学 (英文) University of Oxford, Oxford, UK.
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 石田肇・琉球大学大学院医学研究科・教授 (英文) ISHIDA Hajime, Graduate School of Medicine, University of the Ryukyus, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Rick SHULTING, Institute of Archaeology, University of Oxford, Lecturer

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (連合王国)	
	A.	B.
日本 〈人／人日〉	7 / 35	0
カナダ 〈人／人日〉	1 / 5	0
連合王国 〈人／人日〉	2 / 10	10
合計 〈人／人日〉	10 / 50	10

- A. 本事業参加者 (参加研究者リストの研究者等)
B. 一般参加者 (参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間 (渡航日、帰国日を含めた期間) としてください。これによりがたい

場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>北方圏の狩猟採集集団の生活誌復元をテーマに議論をおこなう。平成28年度のセミナーでは、ブリテン島と日本列島に生活した集団の食文化と生活様式の長期的変遷を骨に残された記録からどのように読み取るのか、その手法と課題についての意見交換を行う。また日英両国で進められている安定同位体分析による古食性の解析についての比較研究、共同研究についての意見交換を行う。上記の課題に加えて、先史人骨に基づく遺伝子マップ・プロジェクトのヨーロッパでの研究の進捗状況とアジア側のデータとの統合について相互連携について協議を行う。本セミナーには古病理学的観点、戦闘行為の痕跡についての報告も加え、幅広い視点から議論を行う予定である。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>本セミナーを通して以下の成果が期待される。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヨーロッパ側の豊富な民族誌データとの比較研究 ・安定同位体分析による先史時代から中世にかけての北方圏集団の食生活の時代的変遷と地域的特性の比較が可能となる。 ・地域集団の移動や拡散行動が及ぼす文化的影響を、家畜動物を含めた北方圏の集団の食性からアジアとヨーロッパで比較することが可能となる。 ・気候変動の復元も含めて、歴史的な環境変化が地域集団に与えた影響をグローバルな視野から考察することが可能となる。 	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>本セミナーは、オックスフォード大学考古学研究所の Rick SHULTING 博士を中心に企画運営される。日本側からは、連携機関である琉球大学大学院の石田肇教授と北海道大学大学院医学研究科の久保大輔准教授、同じく大学院歯学研究科の森田航助教が中心となり、参加メンバーの調整と討議議題の整理を行う予定である。</p>	
<p>開催経費 分担内容</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 外国旅費 金額 2,940,000 円 外国旅費・謝金等に係る消費税 235,000 円</p>
	<p>(カナダ) 側</p>	<p>内容 外国旅費</p>
	<p>(連合王国) 側</p>	<p>内容 国内旅費 会議開催経費</p>

整理番号	S-3
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「北方考古学の成果と課題：移動・統合・アイデンティティ」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “Issues of Archaeology of the North: Migration, Integration and Identities”
開催期間	平成29年1月9日～平成29年1月13日(5日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) スウェーデン、ウプサラ、ウプサラ大学 (英文) Sweden, Uppsala, Uppsala University
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 加藤博文・北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授 (英文) Hirofumi KATO, Center for Ainu & Indigenous Studies, Hokkaido University, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) (1) Neil PRICE, Department of Archaeology and Ancient History, Uppsala University, Professor. (2) Rick KNECHT, Department of Archaeology, University of Aberdeen, Senior lecturer.

参加者数

派遣元	派遣先	セミナー開催国 (スウェーデン)	
		A.	B.
日本 〈人／人日〉	A.	5 / 25	
	B.	0	
カナダ 〈人／人日〉	A.	0 / 0	
	B.	0	
連合王国 〈人／人日〉	A.	4 / 20	
	B.	15	
合計 〈人／人日〉	A.	9 / 45	
	B.	15	

- A. 本事業参加者(参加研究者リストの研究者等)
B. 一般参加者(参加研究者リスト以外の研究者等)

※日数は、出張期間(渡航日、帰国日を含めた期間)としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>本セミナーは、当該事業がこれまで進めてきた北方圏の考古学・人類学的課題を北米地域と北欧地域、さらにアジア地域を比較し、当該事業の中核課題である北方圏の人類史の独自性について討議を行うものである。議論の基盤には、ウプサラ大学とアバディーン大学によるブリテン島とスカンディナヴィア半島地域における人類史の研究成果の蓄積、アバディーン大学による北米アラスカ半島での人類史と先住民集団の民族誌の研究成果の蓄積、そして北海道大学を中心とした日本列島北部における北方文化についての研究蓄積がある。これらを統合し、北方圏という広い視野から議論を行う。</p>	
<p>期待される成果</p>	<p>本セミナーから期待される成果は以下のものがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・先史時代に繰り返される南から北への集団移住と文化変遷の検討から得られる集団の環境適応行動の具体的な様相の提示 ・気候変動期に見られる大規模な集団移住とそれによる文化的統合（社会変動）がそれ以降の社会に及ぼした文化的・社会的影響の解明 ・集団統合がそれ以降の民族アイデンティティの形成に及ぼした影響の解明 ・信仰・儀礼体系に見られる過去の環境適応行動の記憶と神話の比較検討 	
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>本セミナーは、スウェーデン側は Neil, Price 教授を始めとするウプサラ大学考古学部のスタッフ、連合王国側は、Rick, Knecht 講師を中心としたアバディーン大学のスタッフによって企画運営される。日本側は、加藤博文とプロジェクト事務局が中心となり日本側参加者と企画内容についてのスウェーデン、連合王国側との意見交換、調整を行う。</p>	
<p>開催経費 分担内容</p>	<p>日本側</p>	<p>内容 外国旅費 金額 2,250,000 円 外国旅費・謝金等に係る消費税 180,000 円</p>
	<p>(スウェーデン) 側</p>	<p>内容 国内旅費 会議開催経費</p>
	<p>(連合王国) 側</p>	<p>内容 外国旅費</p>

8-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

共同研究、セミナー以外の交流（日本国内の交流を含む）計画を記入してください。

所属・職名 派遣者名	派遣時期	訪問先・内容
北海道大学・教授・加藤博文ほか20名	2016年4月	<訪問先>北海道大学東京オフィス・<内容>プロジェクト参加国内メンバーによる全体会議（H28年度事業の打合せ）
北海道大学・教授・加藤博文	2016年5月	<訪問先>連合王国・オックスフォード大学考古学研究所・<内容>若手研究者短期派遣事業に関する研究打ち合わせ
本事業に参加している若手研究者(助教・大学院生)の中から本プロジェクト内の選考委員会で4月以降に応募者を1名募り、派遣する（現時点では候補者は未定）	2016年6月以降の派遣で派遣期間は3週間以内（短期派遣）	<訪問先>オランダ王国・フローニンゲン大学北極圏旧センター・<内容>若手研究者短期派遣事業として共同研究R-1「北方圏における人類文化・環境適応・景観創造」と関係する北方狩猟採集民研究に参画し、指導助言を Peter, Jordan 教授の下で受ける。
北海道大学・教授・加藤博文、北海道大学・助教・近藤址秋	2016年6月	<訪問先>カナダ、バンクーバー・ブリテッシュ・コロンビア大学・<内容>北方圏における先住民研究・人類学研究の若手育成共同プログラムの準備打合せ
本事業に参加している若手研究者(助教・大学院生)の中から本プロジェクト内の選考委員会で4月以降に応募者を1名募り、派遣する（現時点では候補者は未定）	2016年11月以降の派遣で派遣期間は3週間以内（短期派遣）	<訪問先>連合王国・オックスフォード大学考古学研究所・<内容>若手研究者短期派遣事業としてR-2「北方人類史研究における先住民文化資源の過去と未来」と関係する北方狩猟採集民研究に参画し、指導助言を Chris, Gosden 教授の下で受ける。
本事業に参加している若手研究者(助教・大学院生)の中から本プロジェクト内の選考委員会で4月以降に応募者を1名募り、派遣する（現時点では候補者は未定）	2016年1月以降の派遣で派遣期間は3週間以内（短期派遣）	<訪問先>スウェーデン王国・ウプサラ大学考古学・古代史学部・<内容>若手研究者短期派遣事業として共同研究R-1「北方圏における人類文化・環境適応・景観創造」と関係する北方狩猟採集民研究に参画し、指導助言を Neil, Price 教授の下で行う

本事業に参加している若手研究者(助教・大学院生)の中から本プロジェクト内の選考委員会で4月以降に応募者を1名募り、派遣する(現時点では候補者は未定)	2016年1月以降の派遣で派遣期間は3週間以内(短期派遣)	<訪問先>カナダ・ブリテュシュ・コロンビア大学人類学部及びアルバータ大学人類学部・<内容>若手研究者短期派遣事業としてR-2「北方人類史研究における先住民文化資源の過去と未来」と関係する北方狩猟採集民研究に参画し、指導助言を Susan, Rowley 教授及び Andrzej Weber 教授の下で行う
本事業に参加している若手研究者(助教・大学院生)の中から本プロジェクト内の選考委員会で4月以降に応募者を1名募り、派遣する(現時点では候補者は未定)	2016年6月以降の派遣で派遣期間は1ヶ月間(長期派遣)	<訪問先>カナダまたは連合王国の本プロジェクトの大学協力機関・<内容>若手研究者短期派遣事業として共同研究R-1「北方圏における人類文化・環境適応・景観創造」、またはR-2「北方人類史研究における先住民文化資源の過去と未来」と関係する北方狩猟採集民の共同研究に参画する。
北海道大学・教授・加藤博文ほかアイヌ工芸家1名	2016年9月	<訪問先>連合王国、オックスフォード大学・<内容>ピット・リバーズ博物館に収蔵されるアイヌ民族資料の収集経緯調査と収蔵資料のアイヌ語表記及び保存状態の調査確認
北海道大学・教授・加藤博文	2017年2月	<訪問先>2月、連合王国、オックスフォード大学・オランダ王国、フローニンゲン大学・<内容>大学院生向けのチュートリアルの実施、及び北方狩猟採集民の考古学に関する共同講義の実施。

8-4 中間評価の指摘事項等を踏まえた対応

昨年度実施された中間評価では、共同研究や各セミナーについては、高い評価を受けることができたが、若手研究者の海外の国際学会での報告や論文発表の機会の創出に取り組む必要性が指摘された。この中間評価の結果を受けて、今年度は、研究者交流の枠内に若手研究者派遣のプログラムを新たに設け、短期(3週間以内)と長期(1ヶ月)の派遣事業を実施することとした。この新たな取り組みを通じて、本事業の課題である。若手研究者の研究成果の発信、海外のリーディングスカラーからの的確な研究指導を得る機会創出、研究者ネットワークの拡大に努める。また海外での共同講義の具体的なプログラムをスタートさせ、海外の若手研究者に対しても日本をフィールドとする研究課題の紹介、我が国の研究機関での共同研究を展開させる機会を創出する。

9. 平成28年度研究交流計画総人数・人日数

9-1 相手国との交流計画

派遣先 派遣元	日本 〈人/人日〉	カナダ 〈人/人日〉	連合王国 〈人/人日〉	オランダ (英国側) 〈人/人日〉	スウェーデン (英国側) 〈人/人日〉	合計 〈人/人日〉
日本 〈人/人日〉		3/31 (0/0)	8/201 (0/0)	2/31 (0/0)	5/25 (0/0)	18/288 (0/0)
カナダ 〈人/人日〉	5/105 (10/210)		1/5 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	6/110 (10/210)
連合王国 〈人/人日〉	4/84 (10/210)	0/0 (0/0)		0/0 (0/0)	4/20 (5/25)	8/104 (15/235)
合計 〈人/人日〉	9/189 (20/420)	3/31 (0/0)	9/206 (0/0)	2/31 (0/0)	9/45 (5/25)	32/502 (25/445)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流する人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

9-2 国内での交流計画

11/22 〈人/人日〉

10. 平成28年度経費使用見込み額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	4,440,000	国内旅費、外国旅費の合計は、研究交流経費の50%以上であること。
	外国旅費	7,790,000	
	謝金	0	
	備品・消耗品 購入費	800,000	
	その他の経費	846,800	
	外国旅費・謝 金等に係る消 費税	623,200	
	計	14,500,000	研究交流経費配分額以内であること。
業務委託手数料		1,450,000	研究交流経費の10%を上限とし、必要な額であること。また、消費税額は内額とする。
合 計		15,950,000	